龍膽寺雄全集

第九巻

龍膽寺雄全集

第九巻

龍膽寺雄全集　第九巻

昭和六十年十一月五日　印刷
昭和六十年十二月十日　発行

著　者　龍膽寺雄
神奈川県大和市中央林間二―一四―五

発行者　龍膽寺　雄　全集刊行会
河野　進

発売所　株式会社　昭和書院
東京都新宿区神楽坂二―一九
銀鈴会館二〇七号　〒一六〇
電話　〇三―二六〇―九三五四
振替　東京七―一八二七二

印刷・製本　図書印刷株式会社

定価　二、八〇〇円
©1985　Y. RYUTANJI
ISBN 4-9151122-54-9

目次

創作小説（昭和初期編）
化石の街（長編伝奇小説）……7
アラッジンのランプ……138
創作小説（戦前戦中戦後編）
悪党はハレムに睡る……163
創作小説（最近編）
幻想の街……199

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

UFOの夢……206
雲のテラス（未発表新作）……214
エッセイ　ロマン論……241
随筆　焼夷弾を浴びたシャボテン……247
詩篇（歌謡曲歌詩）……274
初出……283
解説……284

創作小説　昭和初期編

化石の街

第一章

象牙の骰子

三月下旬のとある美しい暮れがたです。

空気は高いところまで水蒸気で一杯で、陽はとうに落ちてしまったんですが、到底まだ夜が近着いたとは思えないあたりの華やかな明るさです。風がないので、泉水の霧吹噴水は石の畳縁を越えて、暫し煙の様に仄かに空間に漾い、やがて消えて、忍びやかにそこらの芝生を濡らしているんでした。

私は丁度軽い夕食をすましたあとで、ヴェランダのすでにともされた支那燈籠の下で、妻の瑠璃子と、遠い薔薇の藪のあたりから時折ぐるりの建物に反響して聞こえて来る、無邪気な妹たちの戯れ声を耳にしながら、椅子を並べて、柔らかいこの黄昏を語り楽しんでいたんです。

…？

さア、ある意味で妻でしょうか。結婚について明るい近代的な解釈を持っている私たちは、恋人の形式のまますでに一つ生活の中に融け合って、近く新婚の披露をする日を指折り数えている仲なんですが。――

匂欄ぎわの籐のテーブルの上には、さっき瑠璃子が温室からもいで来たばかりの白苺が硝子の器の中にミルクに浸っており、私たちは冷たい銀の匙を時折唇に触れさせながら、最近私の書きかけている伝奇物語『化石の街』の梗概について彼女に物語っているうちに、偶然話がその物語の骨子になっている先年のあの私の東ムウルの旅の思い出に移って、奇異なモルマの砂人や化石谷の遺跡などについて語り興じていると、ふと思いがけないある友人の訪問を私たちは受けたんです。

血谷部哲也。――

「いいよ。昔の……学生時代の友だちなんだ。機会だからお紹介せしよう。」

私は客を導くためにまた出て行った書生の三澤の後姿をちょっと見送ってから、テーブルの上の名刺に軽く眼をとめただけで、瑠璃子にいうんでした。

「偶然話が出ていたが、血谷部はインドや東ムウルの漂浪旅行家としては、ちょいとその方面に識られた男なんだ。やや徹底した無郷者でね。お父さんは青山に精神病院をひらいている有名なあの血谷部博士さ。精神病理学じゃ世界の権威なんだけれどね。……」

学生時代に血谷部と私とは同クラスで、一緒に血谷部博士の講義なども聞いたもんでしたが、中途から彼は学生生活を放棄して、――自ら運命の軌道をそらしてしまったんでしたが、そのうち東洋の国際的な漂浪旅客として識られ、私たちに時折刺戟的な新しい話題を提供したりするようになったんでした。

それにしても、――一二年来殆ど親しくは往き来をしていない彼が、この暮れかた突然私を訪ねて来たというのは、一体どういうわけからでしょう？

「やあ。」

しかし彼は、ヴェランダの一隅に私を見出すと、階段をまだ登りきらないうちに、中途から昔そっくりの親しい無雑作な調子で、声をかけるんでした。

「暫らく。……」

私たちは水を打ったばかりでまだ雫のたれている蘭の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

鉢の蔭で、幾年か振りでなつかしく手を握り合ったんです。彼は見かけたところ幾分か以前より老けて、陰気になって、気のせいか面悴れさえしているんでしたが、元気は昔のままで、貝殻を揉む様な独特な笑い声を、朗かにそこらへ反響させるんでした。

簡単に瑠璃子の紹介をして、二人の挨拶のすむのを待ってから、私たちはテーブルを囲んでめいめい席につくのでした。

私は莨を彼にすすめて、そうしていうんでした。

「しかし思いがけなかったよ。今頃君に訪ねられようとはね。」

は、は、は！

幾らか空虚に彼は笑うんです。

「しかし、落ちついた静かな住まいだな。君らしい生活を感じられるよ。」

そろそろ宵闇は芝生や、ものの蔭に忍び寄っているにもかかわらず、庭の妹たちは暮れるのも識らぬげに高く透る声を立てたり、泉水のぐるりを駆けめぐったりして、まだ戯れ合っているんでした。

「それはそうと、……今度のヒマラヤの旅行はどうでした？　ブラスコバヤ王へのいつぞやのあの紹介状は、お役に立ちましたか？」

「あ、……あの節はまた色々と有難う。」

血谷部は思い出したように、

「今度の東ムウルの旅行は色々な意味で、近頃にない収穫があったので、紹介状のお礼もかねて、いずれその報告はするつもりでいたんだけれど。ブラスコバヤ王からよろしくお伝えしてくれとのことで。……」

そこまでいって、ふと彼は口籠りながら附加えるのでした。

「実はこの旅行の報告と聯関して、また一つ君をわずらわさなければならない問題が起きてね。どうも、あんまり土産ばえのしない土産で恐れ入るんだけれど。……」

「……？」

彼はいぶかしげな私の視線に、何かしらためらいがちに、しかし続けるんです。

「もっと早くこれは君に披露すべきだったんだけれど、……実は僕は今度の東ムウルの旅の帰りに、生きた土産を一つ持って来たんだ。十四になる生粋な東ムウルの娘でね。唖でさっぱりものはいわないんだけれども、ちょ

っと日本人なんかにはない美しい可愛い娘なんだ。その点少なからず僕が自分で惚れ込んでいるのだけれど、どうも少し心理的に変なところがあるんだ。東ムウルの娘の十四歳っていえば、殆どもう一人前の女に近いんだが、どうも変なんだね。あるいは精神的な欠陥があるんじゃないかと僕は思うんだけれど。……」

「ふむ。」

私は彼を瞠めたまま、やがていうんでした。

「精神病についてなら、しかし私のところへ持って来るまでもない、もっと手近に、……世界的な権威がいるじゃないか！　お父さんに相談してみたらどうです？」

「無論そうだ。」

彼は何かしら暗い眼で、

「君にいわれるまでもない。……だが君、学者としての父には信頼出来ても、人間としての父に僕は信頼出来ないんだ。つまり、その点で僕は徹底的に父に裏切られたんでね。ただ精神病理学者として、それから青山の精神病院の院長としての父の社会的な声望を慮かって、僕はこれを世間には公言をしないけれどね。それについて、僕はここへこんな筆記帳を持って来たんだ。自分の口から僕は話さないから、一つ読んでくれたまえ。このことについての父とのいきさつも、現在の僕の気持も、ひととおりうなずいて貰えると思えるから。」

私の手に書きよごした一冊の筆記帳が渡されるんでした。私は意味もなく適宜なページを拡げながら、しかし、もう一応訊ねてみるんでした。

「ところで、……そのお土産に君がつれて来た東ムウルの啞の娘さんだがね、その娘さんが心理的に変だというのは、具体的にいうとどんなんだね？」

「石像に恋をしてるんだ！」

「石像に？」

私は反問して、ふと瑠璃と眼を見同合わせるんでした。

「石像というと？」

「いや。」

と血谷部は力なく微笑んで、

「実はこの話は、その啞の娘についてよりまずその石像について、話しはじめなけりァならないんだけどね。……その石像ってのは、ムウルに滞在中、とある古物商の店で見出したので、以前に化石谷の史跡博物館に保存されていたというんだが、あそこの発掘物らしいんだ

ね。史跡博物館に陳列されていたころには、やはりこれも石像の馬にまたがっていたのだそうで、武装を見るとあきらかに古代の騎士なんだ。博物館の陳列品がどうして個人の手などに渡っていたのか、そして馬の方はどこへ行ってしまったのか、それはわからないんだが、それよりも何より僕の好奇心を誘ったのは、この騎士の化石の持主なので、要するに生活のためにこの珍奇な石像を手離す気になって、古物商にその売却方を委せたらしいんだね。君も御承知の様に、あの辺の古物商ってのは古物の売買媒介なので、店に陳列してあるものはみんな古物商自身の持物じゃなくって、ただ店に預かって置いて、買主がつくとその売買の媒だちをするだけなんだからね。で、……僕はその古物商を通して、石像の持主を識ったのだが、この売買に特殊な条件がついていたというのは、……この石像を買ってくれる者は、それに附属して同時にこの石像の持主をも引取ってくれということなんだ。そして、その持主ってのが、つまり今度僕がつれて帰った例の唖の娘なのさ。」

「では、」

と、私は口を挾むんでした。

「その条件をいれて、君がその石像を買ったってわけなんだね。」

「そうだ。……そんなわけで、その女の子と石像とを僕は一緒に手に入れて、旅から帰って来たんだが、ここで問題になるのは、その石像の持主である唖の娘と石像との関係なのだ。君。その娘は、まるで生きている人間に対する様にその石像の騎士に恋してるんだ！……」

「恋してるというと、つまり？」

「まるで石像に噛りついたまま、瞬時も離れないんだ。接吻をする、頬擦りをする、話しかける、抱きつく。……夜などその狂態は見ていられないんだ。」

瑠璃子も私も奇異な物語に、いささか耳を奪われたといった風で、友人の暗い顔を視まもるんでした。

「なるほど！」

私は小さい溜息と一緒にうなずくんでした。

「そりァ君、どうやら精神分析学の好材料になりそうじゃないか。」

「ま、そうだ。」

血谷部は憂鬱に、

「だが君、僕の立場からすると、……僕は君、また僕と

しての愛情があるんだ。どうにかして、唖だから口はきけないまでも、魂の門戸を僕に向けて温かくひらかせたいのさ。これが人情ってもんだろう？　ところが、娘はおよそそれには冷淡なんだ。僕などの存在は全然無視して、石像の騎士に夢中になっている！……僕からいうと、かえって娘の方が石像の様に冷たい。」

僕はだまって、もう一度手渡された例の筆記帳を拡げてみるんでした。

「じゃ、この問題に一応はお父さんも関係されたんだね？」

「一つ読んでくれたまえ。」

友人は熱心にいうんでした。

「その辺からでいい。……輪廓だけでも朧に君にわかって貰えたらそれでいいんだ。そのあとで、君に一つ頼みたいことがあるんだ。」

そういって、改めて瑠璃子を顧みていうんです。

「僕たちばかり勝手な話をしまして、大変失礼ですけれど……。」

「いいえ、どう致しまして。」

瑠璃子は別に会話からのけものにされているのを不服がりもせず、温かいしとやかな会釈を返すんでした。

「どうぞ御遠慮なく。……」

――日はとっぷりと暮れてしまっていました。黄昏の色は匂いほどの残りもなく、霞がかった春の夜の闇に吸われ、月のない静かな星空は大きく傾いて、その上にかかっているんでした。いつの間にか子供たちの声もなくなった庭には、建物の窓から漏れる灯りだけが華やかに闇を彩り、噴水の水煙が仄白いヴェールをそこらに漾わしているんでした。

私は椅子の背を軋ませ、脚を組んで、拡げられた筆記帳の適宜なページから、目を通しはじめるんでした。

――その日以来ずっと私は父の研究室を遠ざけられていました。

私はこの数日間を、生れてこのかた経験のない暗い乾いた気持で暮らしておったのです。そして、今では私は殆ど父の気持を疑う様にさえなりかけていました。

夜になっても灯りのつかなくなった私の書斎は、二月のなかばというのに窓という窓は残らず

八月の夕べの様に大胆に開け拡げられたままでいました。そして、星の凍りつつある霜夜の冷たさは、シンシンと闇を透して身に迫るのでした。

外では風は殆どやみかけていました。

さっきまで悲鳴をあげてゆすぶられていた痩せた樹々の梢は、今は建物の蔭に蝙蝠の様にしつこく吸いついた闇の中に、ひっそりと身を隠していました。

昔カトリックの僧院だったというこの大きな建物は、大体五月の明るい陽の下で見ても、重苦しい、グルーミーな感じを見る人に抱かせる慣わしだったのです。外側に重たい扉を持った丈の高い狭い窓だの、雨漏りの痕を蒼く苔が描いた灰色の壁だの、高い屋根の尖塔だの、針金の切れた避雷針だの、——そういったものが、樹のまばらな寂れた丘の上に、風のやんだあとの鋼鉄の様な月の光を浴びて立っている姿は、昔神の住まいだったというよりは、どうやら悪魔の死骸を思い出させそうです。

かなり最早高く昇っていた月は、二階の私の書斎の窓からもその時覗けました。それは父の研究室の真上と覚しいあたりに立っている三つの黒い尖塔の上に、細く鋭くかかっていました。そして、ちんばの十字架の上縁を氷の様に冷たく輝かしていました。

が、——建物全体の陰惨な姿にひきかえて、父の研究室の窓の一つ一つの、何という悲しい華やかさでしょう！

絵硝子の明り窓の内側には、房つきの緞帳が赤と灯に映えていて、そこには何かしら艶めかしいものの気配が匂いの様に感じられます。

私は暗い荒んだ私の書斎を、今更振返って見ずにはいられないのでした。

そこには、——幾十年ただそうしているかの様に、ぎっしりと書籍で埋められた樫の書棚があります。部屋のまんなかの大きなテーブルには、書き散らした原稿紙が白くうず高く積んでありま す。鉄製の大きなインク壺には、石炭の様にインクがかたまりついており、ちんばの椅子（それはつい今しがたまで私がかけていたのですけれど）

は、何年か人のからだの重みを加えられたことがないかの様に、痛んで、塵が積んでいます。

斜に壁に射込む月の照り返しは、燐の様な仄かな光で、雑然たるこれらのものの配置を、闇から照らし出していました。旅から旅へと常にさすらって、主人公の留守がちなこの書斎は、何かしら牢獄を思わせるように人うとましく冷たいのです。

精神病理学の研究家として世界の第一人者だと人に許されている私の父は、彼自身立派な一個の精神病者だったのです。彼は妻（私の母）の死後宏壮な駒込の邸を大学の寮舎に寄贈すると、そのころすでに何年か空家のままで棄てて置かれたこの奇妙な建物を手に入れ、そして、そっくりと移り住んだのでした。衣食住などすべて俗事に対して極端に無精である父は、自分の研究室として一室をとり、私の書斎に他の一間を選ばせた以外、この建物の中に残らずで部屋が幾つあるかさえ識らないといった風で、残りの部屋々々は昔ここに神が住まっていたと同じ状態で、椅子やテーブルの位置一つ変ってはいないのです。

尤も、父の研究室に選んだ部屋は、この建物の各部屋々々の中でも、特別な一つらしいのです。もと貴賓のもてなしのためにでもあてられたものでしょうか。豪華な樫の浮彫が壁と天井とを覆い、南面には巨大な四つの明り窓が絵硝子で聖書の挿絵を現わし、昼は幽玄な光がそこから床へ流れ、夜は蓋円形の天井からたれた木の枠つきの巨大な花電気が燦然と輝いて、ぐるりと壁を覆った高貴な房つきの緞帳を照し出すのでした。

これらの豪奢な雰囲気と、灰色そのものを思わせる彼の研究との、何という対照のそぐわなさ！

父はいつもこの部屋に籠もっている間は、部屋の隅の暗室実験所の黒い扉の前に、自分の力では動かすことも出来なそうな大きな腕椅子に半身を埋めて、真空の玻璃鐘の中に垂れた微細な白金鏡を、亀の様に背をこごめて瞠めています。

視力と電子運動との関係の研究に昨今没頭しているこの老学者の姿は、まるで一個の化石を思わせるのでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.